杉村和彦著

『アフリカ農民の経済――組織原理の地域比較――』

世界思想社　2004年　vi＋482ページ

高根　務（たかね つとむ）

本書はコンゴ民主共和国（旧ザイール）のクム農民社会の分析を通して，赤道アフリカ農民経済の構造と動態を明らかにしたものである。著者の杉村氏はこれまで，この地域での長期のフィールド調査をもとにした独特の論考を多く発表してきた。本書はそれらの論考を集大成したもので，全500ページに届こうかという大著となっている。ただし巻末に丁寧な索引が付けられているのに加え，現地の写真を多く盛り込むなど，本書を読みやすくする工夫が随所になされている。

全11章からなる本書の概略は以下のとおりである。冒頭の２章で著者はアフリカ小農に関するこれまでの議論を整理し，本書の目的が「アフリカ農民経済の生存維持的特質を……農民の生活経済の組織原理という視角から明らかにしていくこと」（８～９ページ）にあると明示している。続く第３章で調査地の概略が明らかにされた後，第４章以下では焼畑農耕民クム人の生活世界の分析がおこなわれている。議論の中心となっているのは，「トア」と呼ばれる最小リネージの特徴である。トアは個々のクム人の帰属を示す基本的な単位であり，構成員が食事を持ち寄ってともに食べる「共食」集団を構成している。この共食慣行の背後にあるのは，持てるものが持たざるものに分与し，構成員が平等にモノを共有することを当然とする価値世界である。このようなトアを中心としたクム人の社会は，階層性の薄い平等主義的な社会関係を維持してきた。第４章ではこのトアを中心としたクム人社会の基本的な組織原理が明らかにされている。続く第５章では調査地周辺の商品経済化の特徴が明らかにされ，都市近郊に居住する住民のあいだでも前述の「共食」慣行にもとづく消費の平準化がおこなわれていることが指摘されている。第６章と第７章ではクム社会における生業活動の多様性が論じられ，商品経済の浸透にともなって非農業就労が拡大している反面，自給用食糧を安定的に確保するための焼畑農耕の重要性が不変であることが明らかにされている。第８章では農村内部の階層化の問題が取り上げられており，富者と貧者の関係が支配関係の確立をもたらすものではなく，常に富者から貧者に財が流れる「分与の経済」を基礎にして展開していると主張されている。第９章では商品経済化にともない新たに発生しているさまざまな困難に対して，クム社会がどのような論理にもとづいて対応しているかが明らかにされている。最後の２つの章では，アフリカ小農世界の動態に関する考察が他地域との比較の文脈の中でおこなわれている。

本書がクム社会における農村経済の特色を明らかにした一級のモノグラフであることに疑いの余地はない。長期のフィールドワークにもとづいた厚い記述は読み応えがあり，表面的な数値データの分析だけでは見えない農民の行動原理が説得的に明らかにされている。農村社会学や文化人類学を専門とする人にはもちろんだが，アフリカの農業開発に関わる開発専門家やミクロ経済学者には特に一読を勧めたい。

著者は本書の課題が，「アフリカの農民経済と他地域社会における農民経済の間の組織原理の差異〔を―評者〕，……日本の農民経済，東南アジアの農民経済の組織原理との連関で，地域比較の視点から主題化していく」（15ページ）ことにあると述べている。本書のタイトルに，「地域比較」が掲げられている所以である。この問題については第10章で分析がおこなわれているが，今後さらに深めていく余地があると考えられる。同様に他のアフリカ諸地域の農村社会との比較についても，より多くの事例研究をもとにした展開が可能であろう。著者のこれまでの研究に敬意を表するとともに，学界全体によるこの分野での研究の深化に期待したい。

（アジア経済研究所在ゾンバ海外調査員）